

人  
祖  
論

7  
111

057670-001-7

7-111

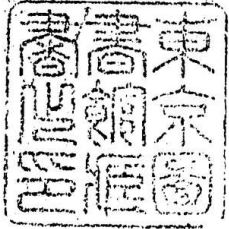
人祖論

查爾斯·駝韻／著

M14

CAS-0007





人祖論緒言

諺ニ曰ク、花ノ春ニ魁ツモノハ、殘霜ノ爲ニ  
害セラレ、説ノ時ニ先ツモノハ、舊弊ノ爲ニ  
毀タルト、宜ナル乎、昔シ天體回轉ノ説、地形  
圓球ノ論等出テ、時ニ之ヲ觝排スル者アリ、  
今マタ人類遞進ノ説發シテ、世ニ之ヲ攘斥  
スル者アルヤ、蓋シ説ノ果シテ非ナルニア  
ラズ、時ノ未ダ來ラザル所以ナリ、余熟非遞

人祖論緒言

進主義ノ説ヲ聞クニ、論者概ネ皆曰ク、人ハ上帝特別ノ創造ナリ、豈禽獸ヨリ出ルノ理アラシヤ、我レ此言ヲ聽クモ、不祥ナリトスト、竊カニ以爲ラク謬テリト、夫レ特別創造ノ説ハ猶太古代ノ一小説ニ過ギズ、學術日新ノ今日ニ在テハ、已ニ陳腐ニ屬セリ、假令姑ラク之ヲ許スモ、豈斯心身ヲ具フル人類ガ、一言一聲ノ下ニ突然現出スベキ理アラ

シヤ、ヨシヤ強テ然リトスルモ、豈ソレ萬物發生ノ通規ニ戾リ種ナクノ物ノ生ズベキ理アラシヤ、マタ姑ラク之ヲ許スモ、豈前日樂土ニ在テ天神ト交際往來シタル幽明兩屬ノ天人ガ、貶落シテ今日ノ人類トナルベキ所以アラシヤ、若シ果シテ然ラバ、既往ヲ以テ將來ヲ推スニ、豈マタ今日ノ人類轉賤シテ後日ノ禽獸トナラザルヲ保ツベケン

ル 神 論  
ヤ、然レバ則チ前日ノ天人ヲ以テ今日ノ人  
類トスルハ、即チ今日ノ人類ヲ以テ明日ノ  
禽獸トナスモノナリ、嗚呼、萬物ノ靈長タル  
人類ガ禽獸ニ貶落セントハ、豈痛哭流涕セ  
ザルベケンヤ、然ルヲ況ンヤ固ヨリ之ヲ姑  
許スベカラザルモノアルヲヤ、試ミニ數千  
年ノ往時ヲ思ヘ、今日文明開化ノ人民ハ野  
處穴居ノ野蠻ナラズヤ、今日ノ錦衣玉冠ハ

木葉獸皮ナラズヤ、今日ノ精醇膏粱ハ血毛  
根實ナラズヤ、曰ク然リ、古史ミナ之ヲ證セ  
リ、次ニ轉ジテ數萬年ノ往時ヲ思ヘ、此數千  
年前ノ野蠻ハ、裸跣横行シテ人ト人ト相食  
ヒシサラニ非常ノ野蠻ナラズヤ、次ニ數千  
萬年、次ニ數萬萬年ト逐次太古ニ轉思セヨ、  
此更ニ非常ノ野蠻ハナホ更ニ非常ノ野蠻  
ナラズヤ、カ、ル非常ノ野蠻ハ、是レ即チ更

ニ下等ノ生物ナラズヤ、今假リニ之ヲ獸類トスルモマタ可ナラズヤ、曰ク然リ、古代人骨ニ今代人骨ヨリ更ニ獸類ニ密似スルモノアリ人類ト更ニ下等ノ生物ト身體造構ニ類似スルモノアリ、彼此ノ才智性習ニ符合スルモノアリ、皆之ヲ證セリ、曰ク然ラバ則チ人類ガ更ニ下等ノ生物ヨリ出タルハ確乎タル實事ナリト、夫レ野蠻ノ開明ニ進

ミシハ内外無窮ノ國難ニ堪ヘシ所以ナリ、内外無窮ノ國難ニ堪ヘシハ身體强健ニノ智謀優出セシ所以ナリ、更ニ下等ノ生物ガ人類ニ遯進セシ所以モ亦然リ、實ニ心身ノ靈妙無雙ナルヲ以テ、時ニ或ハ才智心能ヲ奮勵シ、時ニ或ハ身體造構ヲ改革シ、隨テ苦難ヲ經レバ、隨テ心身ヲ進メ、遂ニ以テ今日ノ人類タルヲ得タリ、而シテ今日此人類タル

モマタ能ク此が爲ニ上進セバ、後日ノ何物  
タル得テ知ルベカラズ、豈此ノ如キ人類ヲ  
以テ特別ノ創造ニ係リ、而シテ后貶落セシ者  
トスルヲ得ンヤ、且聞ク儒ハ陰陽ヲ唱ヘ、佛  
ハ輪回ヲ説クト、日新ノ學術ヲ講ズルヲ若  
シ果シテ不祥ナラバ、儒佛ハ抑何物ゾヤ、マ  
タ或論者ハ曰ク、人類ガ猿類ヨリ出シナド  
トハ苟モ學者タル者ノ採ラザル所ナリト、

是レ誤解ノ甚ダシキモノト謂フベシ、何ニ  
トナレバ此説タルヤ、人類ハ既亡生物ノ一  
種ヨリ出デ、而シテ此既亡生物ノ一種ガ猿類  
ニ近クシテ、更ニ人類ニ髣髴タリシ者ナリ  
トスト雖、固ヨリ人類ガ直チニ猿類ヨリ  
出シトノ説ニ非レバナリ、然リト雖モ、人猿  
ノ天倫モ亦決シテ疎遠ナリトス可カラザ  
ルモノアリ、請フ其一端ヲ言ハン、猿類ニ孤

ヲ恤ムアリ、弱ヲ援クルアリ、恩ヲ報ズルアリ、讐ヲ復スルアリ、危急相報シ相救フアリ、憂樂ヲ同情スルアリ、協同シテ事ヲ謀ルアリ、首長ヲ戴キ令ニ従フアリ、父母ニ孝行ナルアリ、子弟ヲ撫愛スルアリ、飲食ヲ節シテ身ヲ愛スルアリ、一夫一婦ナルアリ、技藝ヲ修ムルアリ、器具ヲ造用スルアリ、所有物ヲ保護スルアリ、身體偉大ニシテ且妙用ヲ備フ

ルアリ、勝テ算フベカラズ、人類ノ強大ヲ怖レ、弱小ヲ陵ギ、柔寡ヲ利シ、酒色ニ溺レ、君父ヲ弑シ、交道ヲ壞リ、倫理ヲ滅シ、荒淫多配、墮胎、殺兒ヲ常トナシ、詐欺、讒姦、争鬪、殺奪ヲ事トスル者ト、豈日ヲ同ウシテ論ズベケンヤ、此レ人類ガ畜ニ猿類ニ下ルノミナズ、ナホ遠ク獸類一般ニ如カザル所ナリ、加フルニ、人類中善惡、正邪、智愚、賢不肖、能不能ノ霄

壞懸殊スルアルガ若キニ至リテハ、マタ一  
ニ目スルニ人類ヲ以テスベカラザルモノ  
アリ、而ルニ猿類ニ及デハ、今日幼稚ノ觀翫  
物ニ過ギザル一小囚虜ヲ以テ、普ホク天下  
古今ノ猿類ヲ規視スル能ハザルナリ、論者  
之ヲ詳カニシテ而ノ説アリヤ、將ク否ズヤ、  
余得テ知ル能ハズ、然レモ若シソレ不幸ニ  
ハ、書アリト雖モ之ヲ披カズ、證アリト雖モ

之ヲ察セザルノ舊弊ヲ帶ビバ、學者ヲ以テ  
自カラ許スモ、新見ヲ開キ、知識ヲ進ムル所  
以ノ道ト相反スベシ、蓋シ此書ハ駝韻ノ手  
ニ成ルト雖モ、此説駝韻ノ作ニ非ズ、駝韻ハ  
古今ヲ網羅シ、先哲ヲ祖述セル者トス、何ヲ  
以テ之ヲ謂フ、駝韻自カラ以テ然リトスレ  
バナリ、且其叙事論斷ニ至リテハ具サニテ  
證アリ、マタ以テ妄度臆測ニ非ルヲ觀ルニ



足レリ、然ノ間、マク竊カニ之ヲ卷籍ニ核シ  
之ヲ實際ニ揆ルニ鑿々據ルベキアリ、尤ナ  
ル乎多年苦心ノ後ニ成ルヤ、世間未ダ此説  
ヲ以テ此書ノ右ニ出ルモノアラズ、余常ニ  
舊弊ノ文化ヲ阻スル大ナルニ慨アリ、積憂  
ノ餘、拙陋ヲ遺レ、遂ニ此譯ヲ成ス、嗚呼、苟モ  
後ノ今ヲ視ル、マク猶今ノ昔ヲ視ルガ如  
キニ非ザラシメント欲スルノ士君子ハ、先

ヅ其己ヲ虚ニシテ此書ヲ繙カバ、則チ遞  
進論ノ正非得テ察スルニ庶シ、然レモマタ  
論旨頗ル大ニシ、固ヨリ區々ノ冊子ニ委ス  
ル能ハザルモノアリ、且新見異聞日ニ出テ  
己マザルハ方今ノ世運ナリ、故ニ此書ノ如  
キハ要スルニ一時ノ霜除ニ過ギズ、マク何  
ゾ盛夏ノ需要ヲ期センヤ、

明治十四年七月

譯者謹識

組論

八〇



リ第十八卷ニ終リ諸動物ノ性撰撰男女相互界ト譯スヲ論シ、下編ハ第十九卷ニ起リ第二十卷ニ止リ、第十九、二十兩卷ハ人類ノ性撰ヲ論シ、大尾ノ第二十一卷ハ人祖論ノ要領ヲ總結ス、然リ而シテ第八卷ヨリ第十八卷ニ至リ至低動物類、昆蟲類、魚類、水陸兩生類、爬蟲類、飛鳥類、哺乳類ノ性撰ニ係リ、第十九、二十兩卷ニ於テ人類ノ性撰ニ係ル論ハマタ淵底ヲ盡セリト謂フベシ、然リト雖モ悉皆此等ヲ譯述スルハ余ガ繁劇ヲ以テ一朝一夕ニ期スベカテザ

ルノ業ナリ、故ニ該計十三卷ノ譯述ハ姑ク之ヲ他日ニ讓リ、大尾ノ第二十一卷ヲ以テ譯書ノ第八卷トス、蓋シ人祖論ノ大意ヲ急成セント欲スルノ旨ニ出タリ、  
一書中ニ引用スル古今四方百家ノ說ノ出處、及ビ其本文中ニ納メ難キ說ノ頭書ニ載ルモノハ、其已ヲ得ザル分ヲ譯出ス、然レモ書中ノ圖及ビ挿譯論證ニ、原注ノ指示ニ據リ之ヲ他ノ書ニ取り、以テ讀者ノ便覽ヲ謀ルモノアリ、但シ其出處ハ一一之ヲ附記セリ、加殖ノ罪固ヨ

リ暹ルベカラズト雖モ、マタ著者ノ注中ニ指  
示スル限ヲ踰エザルモノトス、

一「ヨリラ」シ「ンパンジ」等ノ猿名及ビ其他ノ名  
稱等ノ未ダ和名適譯ヲ得ザル者ハ、姑ラク原  
名ヲ存シ以テ識者ヲ俟ツ、

一人名ハ左ニ一、地名ハ同ジク一ヲ附ス、而ノ度  
量衡ノ如キハ彼我ノ間分數差等ヲ生ジ實ヲ  
失シ易キ所アリ、故ニ差支ナキ分ハマタ姑ラ  
ク原名ヲ存ス、讀者ソレ之ヲ諒セヨ、

譯者又識

人祖論第二版原序

嚮ニ千八百七十一年ヲ以テ發行セル本書第一  
版陸續重刻ニ係リ、其際已ニ竊カニ校正セント  
欲スル者尠シトセズ、而ルニ荏苒今日ヲ致セリ、  
故ニマタ益、彼ノ烈火ノ如キ辯難攻撃ニ屬シ日  
淬月厲以テ鍛鍊ヲ經ルモノアリ、公平無私ノ評  
訂ヲ得テサラニ發明スル所アルモノアリ、四方  
辱知ノ高誼ニ由テ新報奇聞ノ贈寄丘ヲ成シ頗  
ル鴻益ヲ得ルモノアリ、惜ムラクハ其多端ニシ  
勢ヒ要中ノ要ヲ採リ以テ之ヲ斟酌セザルベカ

ラザルヲ、即チ既ニ採録スル者ト余ガ校正スル者トハ之ヲ表覽譯書中之ニ製シ以テ卷首ニ冠ス、卷中新説ヲ以テ解明ヲ加フルモノアリ、舊圖四箇ヲ除キ之ニ易フルニ改正新圖ヲ以テスルモノアリ、此圖ハ烏ゴ德トク氏ガ現生物ニ就テ模寫スル所ナリ、マタ上編ノ附録ニ人類ト高等猿類トノ腦漿異同ヲ辨明スルモノアリ、是レ博士哈屈ハク禮レイニ得ルトコロナリ、此ノ如キ實際觀察ノ論説ヲ舉ルヲ得タルハ依然ノ至リニ堪ヘズ、何ニトナレバ此論題ニ係ル書類近年歐洲ニ續出スト

雖モ至要ノ論點ニ涉リ通俗ノ著述家往々大ニ過ギ實ヲ失スレバナリ、爰ニマタ一言スベキ機會ヲ失スベカラザル者アリ、抑余ガ著書ヲ駁スル論者屢臆想ニ失シ以爲ラク余ハ身體造構及ビ才智心力ノ變化ヲ舉テ特リ之ヲ偶然變化ノ天然撰擇ニ出ル者ニ歸セリト、是レ大ニ謬テリ、余ハ既ニ生物祖宗論第一版ヲ以テ殊ニ此ニ及ビ、心身ノ變化ハ世々使ハ用若クハ不使用ノ結果ニ係ル者多キニ居ル所以ヲ切論シ、マタ此變化ノ幾分ハ生路境遇ノ變

組論

革セル直接ノ影響ナルヲ明示セリ、其他復古造  
構トナスベキ者アリ、連發變化トスベキ者アリ、  
加之天然撰擇ニ由テ諸變化ノ一部ニ轉合スル  
片ハ則チ他ノ部其影響ヲ受クル者アリ、皆已ニ  
之ヲ詳カニセリ、論者マタ曰ク人體造構ノ精細  
ニ涉リ天撰主義ヲ以テ之ヲ解明スル能ハザル  
者ニ至リテハ余マタ性撰主義ヲ發見シ、之ヲ以  
テ之ヲ釋キ因テ以テ遺ストコロナシト、然レモ  
此主義ノ大綱モ既ニ之ヲ生物祖宗論第一版ニ  
詳悉シ、而シテ其人類ニ適スル所以モマタ之ヲ同

書ニ并述セリ、タゞ之ヲコ、ニ極論スルハ他ナ  
シ余始メテ其機會ヲ得タル所以ナリ、然リ而モ  
性撰主義ヲ駁スル說ニヤ、余ガ持論ト符合ス  
ル者アリ、但シ皆小事ニ止リ未ダ大事ニ及バズ、  
是レ初メ天撰主義ヲ駁スル者ト類似セリ、豈奇  
ナラズヤ、夫レ余ガ所謂性撰ナルモノハ確乎ト  
シテ地ニ隨テザルベシ、然リト雖モコ、ニ說ク  
トコロノ如キハ概子一時ノ淺考ニ係リ、或ハ惶  
惶ノ罪ヲ後日ニ得ルモ肯テ知ルベカラズ、是レ  
始メテ事ヲ論ズルノ際萬ニ一ヲ免カルベカラ

ザル所ナレバナリ、蓋シ性撰主義ノ世ニ容レラ  
ル、ハ博物學者ガコ、ニ通曉スルノ日ニアリ、  
然メ具眼ノ識者ノコ、ニ通曉スル者已ニ多シ、  
此主義ノ世ニ容レラル、ハ豈ソレ日アランヤ、

千八百七十四年九月建土白建寒德蘊ニ書ス

人祖論目錄

首卷

總論

卷之一

第一編 人類ノ祖先ノ獸類ヨリ出シ證ヲ論

ズ

○證據ノ性質ヲ論ズ

○人獸身體造構ノ符合スル所以ヲ論ズ

附人獸符合ノ雜證ヲ論ズ

○人胚ノ暢發ヲ論ズ

○身體造構、肉筋、五官、毛髮、骨骸、生殖機等ノ不  
具ヲ論ズ

○結論

卷之二

第二編 人類ノ獸類ヨリ遞進セシ方法ヲ論

ズ

○人心及ビ人體ノ變化スル所以ヲ論ズ  
遺傳ヲ論ズ

變化ノ原由ヲ論ズ

身體ノ變化スル規則ハ人獸ニ於テ異ナル

トコロナキ所以ヲ論ズ

○境遇變革ノ直接分明ナル影響ヲ論ズ

○體部ノ使用増減セル成果ヲ論ズ

○暢發ノ停住ヲ論ズ

○復古造構ヲ論ズ

○連發變化ヲ論ズ

○偶然變化ヲ論ズ

○人口増殖ノ度ヲ論ズ

附人口増殖ノ妨害ヲ論ズ

○天然撰擇ヲ論ズ



人類ノ萬物ニ靈タル所以ヲ論ズ  
 人體造構ノ妙用ヲ論ズ  
 人體ノ直立セシ原由ヲ論ズ  
 人體ノ直立セシヨリ生ゼシ變化ヲ論ズ  
 牙ノ衰微セシ所以ヲ論ズ  
 頭顱ノ大ヲ増シ形ヲ變ゼシ所以ヲ論ズ  
 人類ノ赤身ナル所以ヲ論ズ  
 人類ノ尾ヲ失セシ所以ヲ論ズ  
 天撰ノ境域ハ未ダ遽カニ定ムベカラザル  
 所以ヲ論ズ

天然撰擇以下ヲ結論ス  
 ○人身ノ守ナク助ナキ情態ヲ論ズ

卷之三

第三編 人獸ノ心カ比較ヲ論ズ  
 ○最高ノ猿類ト最低ノ蠻民ト心カノ大差アル所以ヲ論ズ  
 人獸普通ノ性ヲ論ズ  
 情働ヲ論ズ  
 好奇心ヲ論ズ  
 模倣性ヲ論ズ

- 注意カヲ論ズ  
 記憶カヲ論ズ  
 想像カヲ論ズ  
 道理心ヲ論ズ  
 累遷進歩ヲ論ズ  
 獸類ノ使用スル器具及ビ戰具ヲ論ズ  
 ○認識力及ビ悟カヲ論ズ  
 ○言語ヲ論ズ  
 ○愛美ノ感覺ヲ論ズ  
 ○敬神信鬼及ビ謬惑ヲ論ズ

卷之四

第四編 人獸ノ心カ比較ヲ論ズ

續

○良心ヲ論ズ

附良心ヲ賦有スベキ道理及ビ親睦動物ノ性質ヲ論ズ

親睦性ノ原由ヲ論ズ

相反スル性情ノ争鬪ヲ論ズ

○人類マタ親睦動物ナル所以ヲ論ズ

○強盛ナル性情ハ柔弱ナルモノニ勝ツ所以ヲ論ズ

○蠻民モ一ノ大義ヲ重ンズル所以ヲ論ズ  
自愛性ノ表出スルハ人智ヤ、進ムノ後ニ  
在ル所以ヲ論ズ  
社員ノ識見ハ社會ノ風俗ニ關スル所以ヲ  
論ズ

○結論

附善性ノ遺傳ヲ論ズ

○第三第四二編ノ要旨ヲ結論ス

卷之五

第五編 文野両世ニ就テ才徳ノ表出セシ所

以テ論ズ

○天然撰擇ニ由テ才智ノ進歩セシ所以ヲ論  
ズ

模倣ノ緊要ナル所以ヲ論ズ

○徳義ヲ論ズ

徳義ノ表出シテ一社會ニ與フル利益ヲ論  
ズ

○文化ノ人民ニ係ル天然撰擇ヲ論ズ

○文化ノ人民モ曾テ野蠻ナリシ證ヲ論ズ

卷之六

第六編 人類ノ血脉及ビ系譜ヲ論ズ

○動物界ニ就テ人類ノ籍族ヲ論ズ

自然分類法ハ系譜ニ基カザルベカラザル  
所以ヲ論ズ

小事ニ係ル適應變化ヲ論ズ

人類ト四手類トノ類似スル諸小件ヲ論ズ  
自然分類法ニ由テ人類ノ籍族ヲ論ズ

○人類ノ生國及ビ出生ノ年代ヲ論ズ

附人猿ヲ接續スル生物ノ化石ハ未ダ之  
ヲ發見セザル所以ヲ論ズ

○人類ノ血脉ト人體ノ造構トニ由テ推斷セ  
ル人類系譜ノ初代ヲ論ズ

有脊骨動物類ハ上古陰陽并一性ノ者ナリ  
シ所以ヲ論ズ

○結論

卷之七

第七編 人種ヲ論ズ

○定賦性質ノ性質ト價格トヲ論ズ

人類ノ種族ニ就テ前條ノ理ヲ論ズ

○諸人種ヲ以テ各異ナリタル人類ナリトズ

ル説ヲ論ズ

○諸人種ヲ以テ各異ナリタル人類ナリトセザル説ヲ論ズ

諸人種ハ人類中ノ小分ナル所以ヲ論ズ

○單祖多祖ノ兩説ヲ論ズ

附性質ノ歸合ヲ論ズ

○人種ノ最モ異ナリタル者ト雖モ其心身ノ符合スル諸件ヲ論ズ

人類ノ地球上ニ蔓延セシ初時ノ情況ヲ論ズ

○諸人種ミナ一匹偶ノ祖先ヨリ出シ者ニ非ル所以ヲ論ズ

○既込人種ヲ論ズ

○人種ノ分立ヲ論ズ

附異種配合ノ成果ヲ論ズ

生路境遇ノ影響ノ瑣小ナルモノヲ論ズ

○天然撰擇ノ影響トモ視ガタキモノヲ論ズ

男女相互ノ撰擇ヲ論ズ

卷之八

第八編 結論

○人類ノ獸類ヨリ出シ所以ノ大意ヲ結論ス  
附人胚暢發ノ方法及ビ人類ノ系譜ヲ結

論ス

○才智心力及ビ善性ヲ結論ス

神鬼ヲ敬信スル所以ヲ結論ス

○男女相互ノ撰擇ヲ結論ス

○總結論

人祖論目錄畢

總論

本書ノ論旨ヲ詳カニセンニハ、先ヅ此編ノ成リ  
シ所以ヲ略述セザルベカラズ、抑余ガ人類ハ由  
緒ニ關シ聞見發明スル諸件ヲ筆録スル下茲ニ  
年アリ、然リト雖モ敢テ之ヲ世ニ公ニセンコトヲ  
謀ルニアラズ、却テ之ヲ秘シ以テ他見ヲ蔽ヘリ、  
其意蓋シ率然之ヲ公ニセバ、便チ姑息ノ評論ヲ  
激發スルノ他ニ出デザルヲ慮テナリ、是ヲ以テ  
生物祖宗論第一版ニ於テモ、人類ノ祖先及ビ史  
傳ノ如キハ推シテ知ルベシトナシ、以テ人類ノ

地球ニ現出セシ方法ト雖モ、マタ生物ノ通規  
ニ由ラザルヲ得ザル所以ヲ示スニ止リタリ、然  
リト雖モ今日ニ至リテハ事不ニ異ナリ、彼ノ加  
爾、薄額的ノ如キ博物學ノ大家ヲメ、ニ巴大學  
學頭ノ職ヲ以テ演說セル(千八百六十九年)際、必  
クトモ歐洲ハ人民ハ最早生物各特殊ハ創造ニ  
係ルハ說ヲ死守セザルベシトノ語ヲ發セシム  
ルニ至レリ、實ニ博物學者ノ大凡ハミナ生物ノ  
生物ヨリ遞進シタル所以ヲ審カニセルヤ明ケ  
シ、特ニ年富識高ノ博物學者ヲ以テ然リトス、且

或ハ余ガ天撰主義ヲ說ク一過大ニ失セリトス  
ル者ナキニアラズト雖モ、マタ天然撰擇ノ與カ  
リテコ、ニカアル所以ヲ信ズル者已ニ無窮ナ  
リ、蓋シ余ガ說ノ過大ニ失セリヤ如何ニ就テハ  
江湖ノ明裁近キニアレバ、此等ノ論者ハ姑ラク  
之ヲ不問ニ付セリ、獨リ惜ムベキハ博物學ノ老  
家ナリ、躬親カラ聲名ヲ資フモノホ且生物遞進  
ノ說ヲ解スル能ハズ、頑然トノ異論ヲ主張セリ、  
豈言フニ勝ユベケンヤ、  
夫レ此說ハ業ニ已ニコ、ニ至リ、汎ク博物學者

ノ容ル、所トナリ、將ニ世上一般ニ及ボサント  
 スルハ勢アリ、是ヲ以テ余モマタ遂ニ從來筆録  
 スル書類ヲ編綴シ、以テ前著諸書ニ主張セシ持  
 論(萬物說)ノ人類ニ符合スル所以ヲ觀ルニ至レ  
 リ、是レ余ガ始メテ一種ノ生物ニ就テ此說ヲ專  
 論スルヲ得タルトコロナリ、故ニ先ヅ此符合ス  
 ル所以ヲ觀ルヲ主トセリ、サレバマタ其盡セル  
 モノニアラザルハ言ヲ俟タザルベシ、殊ニ人獸  
 ヲ問ハズ一種ノ生物ニ就テ之ヲ專論スル片ハ  
 則チ生物一般ハ分類古今地理上ハ布置及ビ地

層上現出ハ順序ニ係ル明證ニ及ブ能ハズ、タゞ  
 其身體ノ造構胚ノ暢發不具ノ機關ノ如キヲ究  
 察スルニ過ギザルノミ、然レバ此等ノ諸件ハ固  
 ヲリ此說ヲ確證スルニ餘リアリ、但シ反對論ノ  
 要點モマタ決シテ藐忽ニ屬スルヲ得ズ、  
 此書ノ主トシテ論ズル所ハ第一ニ人類マタ他ノ  
 生物ノ如ク既ハ生物ヨリ遞進セシ所以ヲ究明  
 スルニアリ、第二ニ其遞進ノ方法ヲ審察スルニ  
 アリ、第三ニ、諸人種差等ノ價格ヲ判定スルニア  
 リ、專ラ以上ノ諸件ヲ講究セント欲スレバ、未タ



普子ク人種ノ差等ニ深涉シ、細事ヲ殫述スルニ  
遑アラズ、實ニ此論題ハ旨趣洪大ニメ、而シテ博ク  
諸家ノ論述ニ係リ、殆ンド餘蘊ナシ、且人類太古  
ノ事情ニ就テハ、項年房沙的、波沙斯氏ヲ首トメ、  
群哲頗ル之ヲ講論セリ、是レ人類ノ祖先ヲ詳カ  
ニスルノ本原ナリ、學者宜シク查爾斯雷以爾君  
潤、拉勃格君等ノ著書ヲ繙閱スベシ、博士哈屈禮  
ハタ諸大家ノ說ヲ援キ、諸性質ニ於テ人類ノ高  
等猿類ニ異ナルハ、高等猿類ノ高等哺乳類中他  
ノ獸類ニ異ナルヨリモサラニ瑣小ナル所以ヲ

講究セリ、因テ余ハ廣ク事ノ精細ナルヲ期セズ、  
專ラ人類ハ似人猿類ニ異ナル所以ヲ論ズルニ、  
過ギズ、

書中ニ述ル人類關係ノ實事ハ、創論トイフベキ  
モノ、殆ンド稀ナリ、余ハ務メテ古今ヲ綜核シ、博  
ク聚散合離シテ以テ一說ヲ成スニスギズ、蓋シ  
人類ノ祖先ハ得テ知ル可ラズトスル者往々コ  
レアリ、是レ所謂其智ニハ及ブベク、其愚ニハ及  
ブベカラザルモノナリ、畢竟此問題若クハ彼問  
題ノ如キハ、如何ニ學術ヲ以テストイヘドナホ

米首ノ諸家ノ著書ハ既ニ世人ノ熟知スル所ナレバ敢テ其名ヲコ、ニ舉ルヲ要セズ然レバ尾リノ諸家ノ著書ハ英國ニ於テモ或ハ未ダ之ヲ知ラザル者ナキニモアラザレバ、今其一ニヲ述ベンニ千八百六十八年學士巴格納駝論考ノ

講明スル能ハザルベシナドトハ、識者ノ言ニ發セズシテ、愚者ノ口ヨリ出ルトコロナリ、抑人類ハ太古ニ屬スル既ニ區ノ一祖先ヲ一セリトハ、毫モ新異ノ奇論ニアラズ、遠クハ刺馬克既ニ此說アリ、近クハ和禮士、哈屈禮、雷以爾、薄額の拉勃格、巴格納、羅爾等ノ、理學、博物學ノ鴻儒輩出シテ、僉之ヲ主張セリ、而メ殊ニ之ヲ擴充セル者ハ、哈客爾ナリ、哈客爾嚮ニ千八百六十六年形象論綱ノ著アリ、頃ロマタ(新版)千八百六十八年次版、千八百七十年(進化史論)撰アリ、述

著アリ、次グ千八百六十九年此書ノ佛譯成ル、千八百六十五年學士羅爾駝論補遺ノ著アリ、其他ニ嘉彌斯の里内氏ノ不具造構論千八百六十七年印行母の奈博物學社年報第八十七號アリ、學士西哥ノ神像ニ類マ

ルトコロ何レモ人類ノ系譜ヲ究論セザルナシ、若シ該書ノ公行余ガ起稿ノ前ニ係リナバ、或ハコ、ニ至ラザルベシ、乃チ取テ之ヲ讀ムニ、余ガ考定スルトコロ、ロマタ、普子ク同氏ノ論裁ニ出ヅ、而メ其識或ハ余ガ及バザルトコロアリ、故ニ意見事實ノ之ヲ同氏ノ書中ニ得ルモノハ、悉ク其該書ニ於ケル所在ヲ揭示シ、其他論說ヲ同ウスルモノハ、素ヨリ余ガ草稿ニ據ルト雖モ、難問重件ハ之ヲ確證センガ為、頭書ニ註解シテ、該書ニ符合ノ旨意ヲ載ル丁目ヲ指示ス、

且論 恩命 五

夕猿像ニ肖タ  
リト題セル以  
太利文ノ著述  
千八百六十九  
年アリ此類モ  
舉ニ暇アラズ

＊生物祖宗論  
發行以降本書  
初版公行マデ  
ニ男女相互ノ  
撰擇ノ關係ノ  
大ナル所以ヲ  
明解シ之ヲ論  
說セシ者ハ獨  
リ博士哈容爾  
アルノミナリ

人種論  
總論

男女相互ノ撰擇ハ人種ノ分立ヲ大成シタル重  
ナル感力ナリシヲ余ガ久シク信ズルトコロナ  
リ然リト雖モ生物祖宗論第一版第百九十九葉  
ニ於テハ唯其然ルヲ信ズル所以ヲ述ルニ止レ  
リ而ルニ此意見ヲ以テ人類ニ及ボザント欲ス  
ルニ至リ更ニ之ヲ精覈詳明セザル可ラザルヲ  
致セリ是故ニ本書中編以下ハ專ラ男女相互ノ  
撰擇ヲ論ズ而メ之ヲ上編ニ比スレバ頗ル長密  
ナリコレマタ已ヲ得ザルニ出ヅ  
余マタ本書ニ附スルニ人獸情慟發色論ヲ以テ

博士ハ實ニ之  
ヲ諸書ニ切論  
セリ

セント欲セリ抑余ガ思フコニ起セシハ多年  
前查爾斯白爾君ノ著書ヲ一見スルノ日ニアリ  
蓋シ此有名ナル解剖學者ハ人類ニ一種ノ肌筋  
アリ其用一ニ喜怒哀樂愛惡欲等ノ諸情ヲ色ニ  
發スルニ止ルモノトス此說人類ハ獸類ヨリ遞  
進セシ論ト矛盾セリ因テ之ヲ究察スルハ廢ス  
ベカラザルノ事業トナリタリ且情慟ヲ色ニ發  
スルノ方法幾何人種ニ於テ之ヲ同ウスベキヤ  
モ并セテ之ヲ研究セント欲セリ然レド本書冗  
長ニ涉ルノ恐アリ姑ラク之ヲ別著ニ讓ル

人種論  
總論

\*亞理斯托得  
 ハ耶蘇紀元前  
 三百八十四年  
 我神武天皇即  
 位紀元二百七  
 十七年支那周  
 安王十八年二  
 生レ同三百二  
 十三年ニ没ス  
 蓋シ上古希臘  
 國理學ノ大家  
 ナリ

遞進論沿革略  
 生物ハ一定不變ノモノニ類各特殊ノ創造ニ係  
 リトスルハ從來博物學者ノ篤ク信シ博ク諸書  
 ニ論ズルトコナリ然リ而シテ生物ノ出シ所以  
 ル所以ト現生物ノ既凶生物ヨリ出シ所以ト  
 信ズル者ハ其數少ナリト雖モ世々其人ニ乏  
 シカラズ今上代ノ學者\*亞理斯托得モ第ニ博  
 雨露ノ降ルテ穀實ヲ荒損スルシムルヲ以テ  
 戸外ニ在ル穀實ヲ荒損スルシムルヲ以テ  
 種々然ルモノト雖モ其境遇ヲ異ニシテ成ル  
 ヲナリト其境遇ヲ異ニシテ成ルヲ以テ  
 ヲ成ルナリト其境遇ヲ異ニシテ成ルヲ以テ  
 ハ成ルナリト其境遇ヲ異ニシテ成ルヲ以テ  
 然ルモノト雖モ其境遇ヲ異ニシテ成ルヲ以テ  
 モ然ルモノト雖モ其境遇ヲ異ニシテ成ルヲ以テ

總論終

目録  
 公論  
 遞進論

小  
 説  
 論  
 終

ハ平頭ガ為ニ其嚙發ニ便シモノガ如シ夫レ齒ハ固ヨリ此ニ至シハ即チ障マシ偶ノ非ズト雖モ豈モコト偶ニ成リテ果ヲ阻スルモ成ラナク途ニ適レ應ニテ利ハ偶一スル部ハ悉ク此理由ニ因レ應ニテ利ハ偶一スル部ハ悉ク此用ニ適レ應ニテ利ハ偶一スル部ハ悉ク此ハ途ニ適レ應ニテ利ハ偶一スル部ハ悉ク此義ハ此ニ屬スル額ハ斯氏ノ譯述ニ據ラザル義ノ際此ノ見テホ淺小テナ知ルベシ實ニハ暫ク此ニ齒ノ說ヲ以テモ推シテハ實ニハ暫ク此ノ抑此說ヲ主唱セシ者ハ婆本ヲ以テ嚙矢トス然レ婆本ノ說時々變動シテ一定スルトコロナシ加フルニ生物遞進ノ原由ト其方法トハ之ヲ

不問ニ付セリ故ニマタ其說ヲコ、ニ詳述スルヲ要セス、蓋シ此說ヲ以テ夙ニ輿論ヲ一變セシ者ハ刺馬克ナリ、刺馬克始メテ其意見ヲ世ニ公ニセシハ實ニ千八百零一年ニアリ、サラニ之ヲ擴充セシハ千八百零九年ヲ以テ其動物究理ニ於テシ、サラニ再ビ之ヲ擴充セシハ千八百十五年ヲ以テ其無脊骨動物論ノ總論ニ於テセリ、何レモ生物ハ人獸ヲ問ハズ總シテ一ノ太祖ヨリ出シ所以ヲ極論セザルナシ、是ニ於テカ有機物及ビ無機

且論

ニ

物ノ變化ヲ經ルハ毫モ不審議ノ妙爲ニアラズ  
固ヨリ判然タル法則ノアルアリテ然ルヲ致ス  
所以ノ理漸ヤク人心ニ沁入セリ、其功蓋シ大ナ  
リト謂フベシ、抑刺馬克ガ此説ヲ成スニ至リシ  
ヤ其由ル一日ニアラズ、刺氏嘗テ生物ノ正種ヲ  
變種ヨリ區別スルノ難キニ苦シミ、或ル種類ノ  
生物ニ於テ至高ノ度ト至低ノ度トヲ接續スル  
生物ノ等位階級ノ精細緻密ナルニ驚キ、養馴生  
物ノ進變生殖スル例ニ感シ、遂ニ生物ノ遞進ス  
ル理由ヲ看破セシ所以ナリトイフ、然リ而メ變

化ノ原由ヲ論ズルニ至リテハ、或ハ之ヲ生路境  
遇ハ直接ナル影響ニ歸シ、或ハ之ヲ異種配合ハ  
成果ニ歸シ、或ハ之ヲ世々使用若クハ不使用ハ  
結果即チ習慣ノ然ラシムルトコロニ歸セリ、就  
中習慣ノ效驗ニ係リテハ、彼ノ花驢ノ嫩芽ヲ食  
フ習慣ヲ成シテヨリ其長頸ヲ致セシ等ノ如キ、  
自然ニ現出スルアラユル美妙ノ適應變化ヲ以  
テ之ニ歸シタリ、且刺氏マタ累遷進歩ノ理ヲ信  
ジ、生物ハ益進遷シテ止マザルモノトス、故ニマ  
タ不完全ナル生物ノ存在スルハ之ヲ偶然ノ生

發歸セリ、刺馬克氏著書論初版發行ニ係ル  
 ナル、大抵馬本、第九卷、第八卷、第五卷、  
 物學、大抵馬本、第九卷、第八卷、第五卷、  
 本、大抵馬本、第九卷、第八卷、第五卷、  
 父、大抵馬本、第九卷、第八卷、第五卷、  
 論、大抵馬本、第九卷、第八卷、第五卷、  
 奇、大抵馬本、第九卷、第八卷、第五卷、  
 據、大抵馬本、第九卷、第八卷、第五卷、  
 以、大抵馬本、第九卷、第八卷、第五卷、  
 所、大抵馬本、第九卷、第八卷、第五卷、  
 器、大抵馬本、第九卷、第八卷、第五卷、  
 總、大抵馬本、第九卷、第八卷、第五卷、  
 究、大抵馬本、第九卷、第八卷、第五卷、  
 的、大抵馬本、第九卷、第八卷、第五卷、  
 角、大抵馬本、第九卷、第八卷、第五卷、  
 以、大抵馬本、第九卷、第八卷、第五卷、  
 博、大抵馬本、第九卷、第八卷、第五卷、  
 於、大抵馬本、第九卷、第八卷、第五卷、  
 佛、大抵馬本、第九卷、第八卷、第五卷、  
 蘭、大抵馬本、第九卷、第八卷、第五卷、  
 九、大抵馬本、第九卷、第八卷、第五卷、

今變化する經ザルモノナリトス、其結論ノ如キハ  
 テ專ラ之ヲ生路境遇ニ歸セリ、但シ現生物ハ方  
 千八百二十八年ニアリ、饒氏ハ變化ノ原由ヲ以  
 シ者ニアラザル所以ノ説ヲ世ニ公ニセシハ後  
 レデ萬物ハ創生以降連綿トノ一形象ヲ保存セ  
 モ變派シテ此ノ如クニ至リシ者ナリトセリ、然  
 テ名ヅクルモノハミナ其先曾テ一生物ナリシ  
 ヘシガ、已ニ千七百九十五年ニ於テ方今種ヲ以  
 饒弗禮仙費禮亞ハ其子ノ著述ニ係ル記傳ニ見  
 洞、異ニシ、偶合ク、其説ヲ同シ、例ナリト云ベシテ  
 饒弗禮仙費禮亞ハ其子ノ著述ニ係ル記傳ニ見

誠ニ注意ノ懇懃ナルヲ觀ルニ足レリ且其子ノ  
 文中ニモアル如ク此論題ハ宜シク後世ノ窮明  
 スベキトコロニメ而メ其深奥ヲ發見スルノ榮  
 光ハ當ニ來者ノ占ムベキ所ナリトイヘリ  
 千八百十三年學士維爾斯白種婦人ノ皮膚ニ一  
 部分ノ黑人ニ類似スルトコロアリシ事ニ係リ  
 一篇ノ論說ヲ學士會院ニ講讀セリ此論說ノ世  
 ニ公ニナリシハ後千八百十八年其著述ニ係ル  
 白露及單一幻像論ノ出シ日ニアリ維氏曩ニ既  
 ニ天然撰擇ヲ認識セシト此論文ニ明瞭ナリ是

レ實ニ天撰論ノ世ニ出シ權輿ナリトス然レモ  
 維氏ノ說ハ獨リ之ヲ人類ニ限り殊ニ之ヲ其或  
 ル性質ニノミ歸セリ維氏マツ黑人及ビ黑白雜  
 種ノ熱帶地方ニ於テ或ル疾病ヲ免カル所以  
 ノ特質ヲ論シソレヨリ更ニ二箇條ノ意見ヲ述  
 ベタリ其第一ニ動物ハ悉ク多少ハ變化ヲ經ル  
 所以ヲ以テシ其第二ニ養馴動物ハ牧夫ノ撰擇  
 ニ由テ種類ハ改進スルアル所以ヲ以テセリ且  
 コ、ニマタ因ニイヘル說ニ據ルニ斯ノ如ク牧  
 夫ノ人工ニ出ル如キモノマタ自然ノ天工ニ成



ルアリ、是レ甚ダ遅緩ナリト雖モ一ニ其結果ヲ  
同ウセリ、彼ノ人類ノ分レテ種々ノ人種トナリ、  
由テ以テ各其生活スル國土ニ適スルヲ得タル  
ハ即チ觀ルベキハ證ナリ、例ヘバ亞弗利加ノ中  
部ニ散居セル初代ノ人類ニ不意ノ變化ヲ生ジ、  
或者ハ特ニ其風土ニ適シ、以テ其地方ノ病患ヲ  
免カル、一迥カニ其他ノ者ノ及バザル所トナ  
リタランニハ、此ノ如キ特質ヲ稟有スル人類ハ  
便チ速カニ繁殖シ、然ラザル者ハ一々チニ滅  
スベシ、其区滅スルハ獨リ病災ヲ防禦スル能ハ

ザルノミナラズ、ナホ其勇猛ナル隣人ト相争フ  
ニ勝ヘサル所以ナリ、且一々其事情ヲ臆測スル  
ニ、此ノ如キ強豪ナル人種ハ血色果シテ暗黒ナ  
ルベシ、然リ而シテ後代ニ至リテモ其原由ハ依然  
トノ存スルヲ以テ、星霜ヲ經ルニ隨テ益々黒色ナ  
ル者産出シ、而シテ此黒色ナル者固ヨリ其風土ニ  
最適スルヲ以テ、元來其發生セシ地方ニ蔓延シ、  
或ハ其全部ヲ管領スル人種トナラザルモ、必ズ  
其大半ヲ占有スル盛大ノ人種トナルベキナリ、  
維氏一々此意見ヲ以テ寒帶地方ニ生活スル白

人種ニ及ボセリ抑余ガ學士維爾斯ノ著書中前  
顯ノ章句ヲ參攷スルヲ得タルハ、是レ即チ合衆  
國ノ羅禮氏ガ貌禮士氏ヲノ之ヲ余ニ指教セシ  
メタル厚誼ニ出デタリ、  
神學士萃巴的ハ後ニ滿遮士打ノ首牧師トナリ  
シ人ナルガ、屢本旨ニ係ル說アリ最初千八百二  
十二年園藝學社報告第四卷ニ於テシ、次ニ石蒜  
論千八百三十七年刊行第十九葉及ビ第三百三  
十九葉ニ於テセリ、其說ニ曰ク、植物學上ニ於テ  
種類ト唱フル者ハ、園藝學ノ經驗ヲ以テ確定ス

ルトコロニ據レバ、變種ノヤ、高等ニ達シ而メ  
ヤ、其永續スルニ至リシ者ニスギズト蓋シ動  
物モマタ此理ニ由ラシメタリ、即チ首牧師ハ生  
物ノ何物ヲ問ハズ總テ一種類ノ創メテ生ゼシ  
際ハ其性可塑的ニ變スルニ易ク、而メ現存種  
ハミナ此等ノ種類ノ異種配合若クハ其變化ニ  
由テ發生セシ者ナリトス、  
千八百二十六年博士額蘭の淡水海綿ヲ論ズル  
文壹丁不<sub>レ</sub>理學雜誌第十四卷第二百八十三葉ヲ  
以テ、生物ハ生物ヨリ出シ事ト其變化ヲ經ル際

ニ遞進スル事トヲ確信スル所以ヲ明言セリ、然  
ノ千八百三十四年印行「邦文」邦文論第五十  
五講ニ於テハ此說サラニ詳カナリ、  
千八百三十一年巴特力馬太氏艦材及培養論ノ  
著アリ、書中生物ノ祖先ニ係ル所見ハ余ガ和禮  
士氏ト共ニ林娜社雜誌ニ論述シ、而ノ更ニ之ヲ  
生物祖宗論ニ擴充シタル論說ト一ニ其方向ヲ  
同ウセリ、然レデ馬氏ノ說ハ他ノ旨意ヲ論ズル  
著書ノ附録中ニ在リ、故ヲ以テ千八百六十年四  
月七日加獨那新聞ニ於テ馬氏自カラ之ヲ指示

セルニ至リシマデハ、得テ之ヲ知ル者ナカリシ  
ハマタ遺憾ナリトス、馬氏ノ說ノ余ガ所見ニ異  
ナルトコロハ瑣細ナル小事ニ止レリ、馬氏蓋シ  
以爲ラク此世界ハモト人口稠密ナリシガ、中葉  
其凶滅スルニ垂ントシ、然ノ後興復セシ者ナリ  
ト、マターノ考察ニハ、新出生物ハ何等ノ模型ニ  
モ由ラズ所生祖宗ニ脫離シテ生發セル者ナリ  
トス、然レモ書中或ハ解シ難キトコロ無キニシモ  
非ズト雖モ、之ヲ約スルニ、生路境遇ハ直接ナル  
影響ト、天然撰擇ハ效驗トハ明カニ之ヲ認識セ

地質學及ビ博物學ノ巨擘佛克君ハ加奈里島誌  
千八百三十六年刊行第百四十七葉ニ於テ生物  
ノ變種ノ徐々ニ永定ノ種トナリ、然ノ已ニ永  
定ノ種トナリシ以上ハ彼此雜種ヲ生ズルニ適  
セザル者トナルノ說ヲ論述セリ、  
拉賓斯格千八百三十六年印行比米新植物論第  
六葉ニ曰ク各自ノ種類ハ總ジテ一タビ變種ナ  
リシモ、特殊不動ノ性ヲ成スニ隨テ漸次ニ一箇  
ノ種類トナリタリ、但シ(第十八葉)一類ノ模型即

チ其鼻祖タル者ハ此例ニアラズト、  
博士哈爾德曼ハ千八百四十三年ヨリ同四十四  
年ニ至リ生物ノ暢發ト其變化トノ問題ニ係リ、  
一ハ之ヲ是トシ、一ハ之ヲ非トセル兩端ヲ酌テ  
巧ミニ之ヲ論說セリ、(波斯敦合衆國博物雜誌第  
四卷第百六十葉)蓋シ其論ノ大綱ハ之ヲ是認  
スルヲ明カナリ、  
創世事跡ノ發行ハ千八百四十四年ニアリ、此書  
ハ匿名ノ著述ニ係リ固ヨリ其人ヲ知ルニ由ナ  
シト雖モ、千八百五十三年其第十版校正(第百五

十五葉中ニ於ケル著者ノ言ニ據レバ、有生物ノ諸種類ナル者ハ、最低最古ノ者ヨリ最高最新ノ者ニ至ルマデ、ミナ天ノ豫監ニ屬スル感化力ノ所作ナリ、然レ此感化力ニ二種アリ、其一種ハ直チニ有機物ニ感及シ之ヲノ或ル時間ニ逐代累進セシメ、最高ナル複子葉植物及ビ有脊骨動物ニ終ル有機物ノ諸級ヲ遞進セシメタル感化力是ナリ、但シ此等ノ諸級ハ其數甚ダ僅小ニシテ、其間ニ數彼此ノ連續スル緣故ヲ確定スルニ苦シム如キ生物ノ相現ハル、トアリ、ナホ一種ハ自

然神學者ノ所謂適應變化ニ等シク、衣食住及ビ天象ノ如キ外部ノ事情ニ應ジ、世代ヲ逐テ有機物ノ造構ヲ沿革セシムル所以ノモノニシテ、彼ノ活體ノ生易ト連結シタル感化力是ナリトイフ著者マタ有機物ノ進遷ハ不意ノ跳過ニ係リ、生路境遇ノ影響ハ徐々ニ漸成セルモノトス、然レ生物ハ一定不變ハモハニアラザル所以ハ、大要ハ首尾貫徹セリ、然レモ上ニイヘル二種ノ感化力ハ、何如ニシテ之ヲ學術上ノ理ニ基カシメ、以テ萬物ノ現呈スル無窮ノ美妙ナル協合適應ノ解

釋トナスベキヤ得テ知ル能ハズ譬ヘバ啄木鳥ノ何如ニノ其奇特ナル習慣ニ適應スルヲ致セシヤ是ニ由テ之ヲ解スルヲ得ザルナリ此書初メノ印行ニ於テ或ハ識量ノ充實セザルトコロアリ或ハ學術上ノ注意ニ乏シキトコロアリト雖モ、マタ論說ノ活潑ナルト、文章ノ巧妙ナルトニ因テ博ク江湖ノ高評ヲ得タリ、今余ヲ以テ之ヲ觀レバ、此書ハ遞進ノ論題ヲ世ニ布キ、舊弊ノ臆見ヲ掃除シ、天下ノ人心ヲノ陸續繼出セル新說ヲ容ル、ニ宜シキ餘地アラシムルヲ致セリ、

其功焉ンゾ稱セザルヲ得ンヤ、千八百四十六年地質學ノ老家德摩流斯打哈羅氏ノ論說貌流設爾學術院雜誌第十三卷第五百八十一葉アリ、其文ヤ、短ナリト雖モ其論太ダ巧ナリ、其說蓋シ生物ノ諸種類ハ特殊ノ創造ニ係リトノ說ヨリモ、生物ハ生物ヨリ遞進セシモノナリトノ說コソ其真ナルニ幾シトセリ、但シ同氏が始メテ此說ヲ唱出セシハ千八百三十一年ニアリ、博士窩蘊ハ千八百四十九年ノ著述肢質論第八

十六葉ニイヘルアリ、曰ク此世界ニ於テ現生物ノ未ダ生立セザルノ日、已ニ久シク生物類似物ニ種々ハ進化ヲ經ルモハアリ、然レモ此ノ如キ有生物ヲメ順序ヲ逐テ進化セシムル所以ノモノハ、何等ノ天法マダハ何等ノ原由ニ歸シテ可ナリヤ、吾人ハ未ダ之ヲ詳カニセズト、後千八百五十八年ニ至リ、博士マタ英國社ニ於テ演ルニ造化ハ連綿タル作工即チ有生物ノ自然ニ適應化育ヲ享ル所以ヲ以テセリ(演說第五十一葉)而メサラニ其地理上ノ布置ヲ論ズル敷行(第九十

葉ニ於テハ、新西蘭ノ無尾鳥及ビ英國ノ赤鳩ノ如キヲ以テ獨リ之ヲ該地方ニ於テ特殊ノ創造ニ係ルモノトスル說ハ、地理上ノ布置ノ規則ニ戾リ全ク無根ノ妄說ナリトセリ、蓋シ世ハ動物學者ガ所謂創造ナル語ハ其知ラザル生發ハ方法ヲ目スルハ他ニ出デザルモハナリ、故ニ博士窩蘊モ亦此字義ヲ更張セリ、其言ニ曰ク世ノ動物學者ガ彼ノ赤鳩ノ如キ例ヲ以テ之ヲ該地方ニ於ケル鳥類ノ特殊創造ニ係ル證トナシ、而シテ此等ノ鳥類ノ何如ニシテ此等ノ鳥類ニノミ生ジ

且其何如ニモ此等ノ鳥魯ニノミ生活スベキヤ  
ハ得テ知ル能ハザル所ナリトスルハ、已ノ無知  
無識ナルヲ揚言スルモノニ人即チ此等ノ鳥類  
ト此等ノ鳥魯トノ本原ヲ以テ之ヲ世俗ノ所謂  
造物主ナル者ニ歸スルヲ明瞭ナリト、今若シ本  
回演説ノ論旨ヲ一々説明セバ、此有名ナル理學  
ノ大家モ、既ニ千八百五十八年ヲ以テ彼ノ無尾  
鳥及ビ赤鳩ノ如キモノ、知ルベカラサル所以  
ニ由テ創メテ方今ノ居處ヲ占メ即チ得テ知ル  
能ハザル方法ニ由テ以テコトニ現出スルヲ得

タリトノ説ノ信ヲ置クニ足ラザルヲ曉リシト  
更ニ明カナルベシ、  
此演説ハ余ガ和禮士氏ト共ニ林娜社ニ於テ生  
物ノ祖先ニ係ル論ヲ講述セシ後ニアリ、生物祖  
宗論第一版上木ノ際ハ諸家ノ屢誤解スル如ク  
余モマタ誤テ造化ハ連綿タル作工ノ語ヲ以テ  
博士窩蘊ヲ他ノ古生物學者ト同視シ、即チ生物  
ノ一定不變ナルヲ確信スル者トセリ、此事ノ余  
ガ誤解ナリシハ有脊骨動物解剖論第三卷第七  
百九十六葉ニ就テ發見スルトコロナリ、故ニ生



物祖宗論第六版ニ於テハ、該書第一卷第三十五  
葉ニ載スルトコロノ「生物ノ太祖ハ疑ナク云  
ノ語ヲ以テ始ムル章句ヨリ酌奪シ來テ述ルニ  
博士窩蘊ガ新種ノ生發ハ天然撰擇ノ與カリテ  
カアルヲ信ズル所以ヲ以テセリ、然レ其言今ニ  
至リ決シテ實ヲ失セザルナリ、然レ該書第三  
卷第七百九十八葉ニ於テハ其說轉動シテ曖昧  
タルトコロアルヲ覺ヘリ、余マタ博士窩蘊ガ倫  
敦評論ノ主筆ニ贈リシ文書ヲ抄録セリ、其文ニ  
據レバ、博士窩蘊ガ天然撰擇ノ說ヲ唱出セシハ

余ガ之ヲ說出セシ以前ニ在リトイフ、余モ主筆  
モ同ジク之ヲ知レリ、是レ太ダ奇怪ナリト雖モ  
余ハ姑ラク博士ノ言ニ任スベシ、然レモ若シ該  
書第三卷第七百九十八葉ニ載ル說ヲ採ルルハ、  
余ガ今博士ノ言ニ任スルハサラニ多少ノ失誤  
ヲ免カルベカラズ、實ニ博士窩蘊ノ書ノ彼此ノ  
部分矛盾シテ解シ難ク、其相齟齬セルノ甚ダシ  
キハ啻ニ余ガ知ルノミナラズ、ナホ諸學者ノ明  
カニ認識スルトコロナリ、蓋シ天撰主義ノ說出  
ニ係リテハタトモ博士窩蘊ガ余ニ先ツトモ

余ガ博士ニ先ダツトモ、固ヨリ功ナキニ似タリ、其故ハ上文ニ述ベタル如ク學士維爾斯及ビ馬太氏ガ吾輩二名ニ先ダツテ之ヲ說出セシ、ニ遠キ往時ニアレバナリ、既以西德饒弗禮仙費禮亞ハ千八百五十年ニ演述セル講義千八百五十一年一月動物學雜誌ニ抄録スニ見ヘシガ、定賦性質ハ各自ノ生物ニ定賦スルトコロニ、凡ソ其關係スル事情ニ變動ノ生ゼザル間ハ連綿トシテ永續セリ、然リト雖モ一朝之ニ變動ノ生ズルニ會スレバ、則チ此性質モ

マタ隨テ變動セリ、且野生物ヲ以テ之ヲ考フルモ、生物ニ定規ノ變動アリ、コトニ野生物ノ變動シテ馴化物トナリ、馴化物ノ變動シテ野生物トナリ、其現致セル不同ノ一種ノ特質トナルモノニ就テ之ヲ實察スレバ、太ダ明カナリトイヘリ、後同氏ノ著述ニ係ル博物略論千八百五十九年刊行第二卷第四百三十葉ニ於テハ、サラニ此說ヲ擴充セリ、  
近來發行ノ冊子ヲ觀ルニ學士弗里屈既ニ千八百五十一年德伯林醫學雜誌第三百二十二葉ヲ

以テ有生物ハ總シテ一ノ太祖ヨリ出シ者ナル  
所以ヲ論ゼリ但シ其說ノ據ルトコロト之ヲ論  
ズル方法トハ全ク余ニ異ナルモノナリ然レモ  
マタ千八百六十一年ニ至リ血脉統系ニ由テ生  
物ノ祖先ヲ論ズト題セル論文ヲ著述セシカバ  
其說ヲコ、ニ略述スルハ大ニ難事ニメ且徒勞  
ニ屬セリ  
華巴的士平薩氏ハ始メ千八百五十二年三月魁  
新聞ニ登録シ後千八百五十八年其著述ニ再録  
セル論文ニ於テ得タル修練ト大ナル勢力トヲ

以テ主宰創世ノ論ト生物遞進ノ說トヲ比較究  
明セリ同氏ハ生物ノ遞進セル所以ヲ論ズルニ  
養馴動物ノ進變生殖スル例ヲ以テシ諸生物  
ノ胚ハ時代ニ經過スル變化ノ故ヲ以テシ正種  
變種ヲ區別スルハ難キ所以ヲ以テシ生物一般  
ニ高低進否ハ等差アル理由ヲ以テス而ノ生物  
ノ遞進スル原由ハ其生活上ノ境遇ニ於ケル變  
革ニ歸スルモノトスマタ千八百五十五年ニ於  
テ同氏ガ心理學ヲ論ゼシハ各自ノ心力及ビ才  
能ニ係リ高等優劣ノ度ヲ講究スルノ必要ナル

旨趣ニ出デタリトイフ、  
 千八百五十二年有名ナル植物學者諾下氏ハ生  
 物ノ祖先ニ論及シ始ノ園藝學雜誌第百二葉ニ  
 登録シ後サラニ博物館新編雜錄第一卷第百七  
 十一葉ニ抄録ス其新生スルハナホ植物ノ培養  
 ニ由テ變種ノ發生スルガ如キ方法ニ由ル所以  
 ヲ明言セリ而ノ此培養ハ即チ之ヲ撰擇生育ス  
 ル人爲ニ歸セリト雖モ此ノ如キ撰擇ノマタ天  
 爲ニ成ル何如ニ至リテハ未ダコノニ論及セズ  
 同氏ハマタ首牧師華巴的ノ如ク生物ノ初代ハ

現今ニ比スレバサラニ可塑的ニ其性變ズル  
 ニ容易ナリトシ且頗リニ天運主義トスルモノ  
 ヲ主張セリ其意蓋シ天運ナルモノハ吉凶禍福  
 ヲ并一セル奧妙不審議ノ勢力ニ天地開闢以  
 降普子ク有生物ニ在テ樞要ノ大權ヲ占メ物理  
 ノ自然ニ從テヨク其形狀美醜大小増減及ビ死  
 生榮枯ニ關スル諸件ヲ總括シ加フルニ此有生  
 物ヲ各當然ノ地位ニ於テ其天分ヲ享ケシム  
 ル者ナリトス貌倫ガ遠進論ニ於ケル引用ニ  
 大家究既ハ顯ハス所以テ明論セリト耳東一變

千八百五十年、  
 其博究ニ於テ、  
 知ルコトヲ以テ、  
 列布利用ニ據リ、  
 列布利ニ據リ、  
 蓋シ此以テ、  
 進シテ、  
 決シテ、  
 ニシテ、  
 一科ニテ、  
 千八百五十三年、  
 地質學社報告第二編第十卷第三百五十七葉ハ  
 現生物ノ元種ハ曾テ其四匝ニ在ル一種ノ傳流  
 質ヲ特有スル最微分子ニ化合シ、蒸々トノ新生

物ヲ發生セリ、其情ナホ彼ノ瘴癘毒ノ害ナリ、  
 想像スベキ新疾ノ傳流シテ防クベカラザルガ  
 如キ者ナリトイヘリ、  
 同ジク千八百五十三年學士書方仙好小冊子ノ  
 著アリ、**羅因**博物學社雜誌中マタ之ヲ載ス、此書  
 ハ主張スルニ地球ニ存スル有機物ノ累進暢  
 發スル所以ヲ以テセリ、即チ生物ノ二三ハ非常  
 ニ變化ヲ經テ遞進シ、其他ノ多クハ長時變化ヲ  
 歷ズシテ元形ヲ保存セル者ニテ、生物ニ種類ノ  
 別アルガ如キハ是レ其中間ニ存スベキ生物ノ

ハ失セシ所以ナリ、故ニマタ現生動物ハ發生ノ際新意ノ創造ニ係リ既ハ動物ニ異ナルモノニアラス、素ヨリ既ハ動物ノ生殖繁茂セル枝葉ナリトス、

有名ナル佛國ノ本草家列高氏ハ千八百五十四年ニ一書ヲ著シ、豫テ研究セル生物ノ變否ニ係ル論題ハ到底饒弗禮、仙、費禮亞及ビ吳以的ノ二大家ガイヘルトコロニ歸著スル所以ヲ論述セリ、講地植物學第一卷第二百五十葉、但シ此大著書中他ニ散見スル章句ニ據レバ、同氏ガ生物ノ

變化ヲ信ズルハ其程度幾何ノ點ニ至リシヤ未ダ之ヲ確明スル能ハザルナリ、千八百五十五年神學士米田巴維爾天地歸一論ト題セル著書ヲ以テ萬物創造ノ理ヲ究明セリ、同氏ハ專ラ新種ノ生發ハ定法ニ屬シ決シテ偶然ニ成ラザル所以ヲ説ケリ、即チ澗華沙爾君ガ嘗テイヘル如ク、此生發ハ奇怪ナル神方ニ由ラズノ尋常一般ノ方法ニ出ル者ナリトセリ、其論ノ巧妙ナルマタ感ズルニ餘リアリ、千八百五十八年七月一日和禮士氏ガ余ト共ニ

林娜社ニ於テ講述シタル論文ハ載テ同社雜誌  
第三卷ニアリ、已ニ生物祖宗論ノ總論ニ於テ論  
及セシ如ク、此論說ハ和禮士氏ガ天撰主義ヲ論  
シ頗ル詳核ヲ極ムルモノナリ、  
米亞君ハ抑動物學者ノ泰斗ト仰ガル、人ナル  
ガ向ニ已ニ千八百五十九年ヲ以テ方今全ク異  
ナル生物ト雖モミナ一ノ祖先ニ出シヲ信ズ  
ル所以ヲ明言セリ(千八百六十一年刊行博士爾  
得弗和愚奈生物論第五十一節ヲ見ヨ)其說蓋シ  
生物地理上ノ布置ノ規則ニ據レリ、

千八百五十九年六月博士哈屈禮永存生物ト題  
セル論說ヲ大學院ニ演講セリ、蓋シ斯ノ如キ問  
題ニ論及セル其際同氏が演ブルトコロニ據ル  
ニ、動植物ノ各種即チ有機物ノ各大種類ヲ以テ  
特殊ノ創造ニ係ルモノトナシ、然ノ其相距ル多  
年ノ間隙ヲ經テ續々地上ニ現出シ、以テ其諸部  
ニ散布セルモノナリト姑許シタランニハ、此永  
存生物ノ義ヲ解スルニ由ナク、斯ノ如キ姑許  
ハ固ヨリ森羅萬象ノ諸例ニ戻リ、マダ古來ノ傳  
言若クハ天啟ニモ據ルベキトコロナカルベシ、

然リト雖モ、此ニ反シテ彼ノ生物遞進ノ説ヲ以テ此永存生物ノ義ヲ解スレバ、其生存ハ實ニ永遠ナリトイフベシ、彼ノ各地層成立ノ年代ニ經過シタル遞進ノ如キモ、從來經歷セル遞遷進化ノ全件ニ比スレバ、タゞニ一小細事ニ過ギザルノミ、  
千八百五十九年學士夫加濠洲植學入門ノ著アリ、本書ノ初編ハ專ラ生物遞進ノ理ヲ説キ、之ヲ證スルニ親炙セル新奇ノ實事ヲ以テセリ、  
生物祖宗論第一版ノ發行ハ千八百五十九年第一

十一月二十四日ニ於テシ、其第二版ハ千八百六十年第一月七日ニ於テセリ、



7  
3  
111

遞進論沿革略終

